

第十四編 東西交流史とポルトガルの足跡

(ヴァスコ＝ダ＝ガマと「インド航路発見」そのⅠ)

マリンデイの海岸近くにフランシスコ＝ザビエルがインドへの航海の途中2人の水兵を埋葬したという教会がある。教会の名前は「ポルトガルのチャペル (Portuguese Chapel)」とあり、時に1542年のことと刻まれていた。聖フランシスコ＝ザビエル (St. Francis Xavier)は、日本史を紐解くとイスパニアのイグナチウス・ロヨラ等が1534年に組織したイエズス会 (または耶蘇会) という伝道ミッションに属し、ポルトガルの勢力圏にあった東アフリカ (現ケニア共和国) のモンバサ、マリンデイ、そして最大の拠点・インドの西海岸のゴアに到達し、インドからマラッカ等を遍歴、そして、1549年日本 (鹿児島) へと遣ってきたという。ザビエルは大内義隆や大友宗麟らの大名の保護を受け、布教を開始している。ポルトガル船は、布教を認めた大名領に入港したため、大名は貿易を望んで宣教師を保護すると共に、布教に協力し、なかには洗礼を受ける大名 (キリシタン大名) もあった。キリシタン大名といわれた大友宗麟、有馬晴信、大村純忠は、1582年に、「天正遣欧使節」と呼ばれた少年使節団をローマ教皇のもとに派遣している。少年使節団 (伊東マンショ、千々岩ミゲル、中浦ジュリアン、原マチノの4少年) は、マカオ、マラッカ、ゴア、モザンビーク、喜望峰をまわって、リスボン、マドリードを経てローマに到着し、教皇グレゴリオ13世に会い、1590年に帰国している。つまりインド航路を往復しているのだ。今でも驚くような大旅行を少年たちはやってのけたのだ。

ザビエルの後、ポルトガル人宣教師ガスバル＝ヴィレラやルイス＝フロイスらが九州を中心に近畿地方・中国地方の布教につとめ、キリスト教は急速に広まった。信者の数は1582年頃には、肥前・肥後・壱岐などで11万5千人、豊後で1万人、畿内などで2万5千人に達したという記録がある。徳川三代将軍家光の治世下で島原の乱 (1637-38年) を引き起こした3万7千人の信徒が無残に鎮圧されている。その後、隠れキリシタンとして御禁制の間も延々とその宗派が生き延び続けたとも聞いている。今でこそ思想信条の自由が憲法で保障されているが、3-4世紀前の日本にはそのような自由は無かった。島原の乱の時にはキリスト教世界の支援はなく、キリシタンの一揆として鎮圧されたのは何故だろうか？中国のマカオにはポルトガルの前進基地があり、フィリピンにはイスパニアの軍が居たはずである。答えはやはり当時乱世を統一した日本の戦国大名の持つ軍事力と鉄砲等の火器の水準が世界的なレベルにあったためだろうと思う。日本への侵攻はポルトガルやイスパニアにとって至難の業であったのだろう。

私がザビエルを実際に見たのはインドのゴアでのことだ。見たといってもザビエルのミイラが安置されている黒塗りの教会でのことだ。驚いた事にこのミイラの右手首から先が

切り取られてないという。無いのではなくザビエルがマカオ付近（中国広東省）で病没した時に形見として本国に持ち帰ったからである。当時のミッションの宣教師の覚悟が想像できる。現在のように気軽に大陸や大洋を横断できたわけではない。死と直面しながら、しかし、神の福音を未開の民に伝えなければという大いなる宗教的情熱があったからであろう。

ポルトガルが、日本史に大きな影響を齎しているのはキリスト教伝播に絡んだことだけではない。南蛮貿易である。1543年にポルトガル人を乗せた中国船が九州南方の種子島に漂着した。これがヨーロッパ人の日本渡来の最初である。このとき、島主の種子島時堯（ときたか）は、ポルトガル人の持っていた鉄砲を買い求め、家臣にその使用法と製造法を学ばせたといわれている。これを契機にポルトガル人は毎年のように九州の諸港に来航し、日本との貿易を行なった。スペイン人も、およそ40年遅れて、1584年に肥前の平戸に来航し日本との貿易を開始しているが、このポルトガル人とスペイン人を南蛮人と呼び、その貿易を南蛮貿易と呼んだ。南蛮人は、鉄砲・火薬や中国の生糸を齎し、日本の銀などと交易した。日本の戦国時代に終止符を打つ上で活躍した武将達に共通した事は、この鉄砲・火薬の積極導入であったことは誰しも知っている。戦国時代は技術革新の時代であった。その生産技術を代表するのが鉄砲の大量生産であった。鉄砲は、伝来するとすぐに、和泉の堺、紀伊の根来、雑賀、近江の国友などで大量生産された。伝来後わずか8年後には畿内で鉄砲を使用した戦闘が行なわれ、10数年後には、全国的に大量の鉄砲が普及したというのだから、ポルトガル人の齎した武器としての鉄砲が日本の天下統一に大きな助けになったといっても過言ではない。大阪の陣では大砲（おおづつ）等も戦場で使われていた。この伝来した鉄砲や火薬の大量生産を可能にした、日本古来の製鉄技術や火薬製造技術の水準の高さには驚かされる。今でも世界の製鉄業を量（生産量）的にも質（技術）的にもリードしているのは日本の鉄鋼業である。

20年以上前になるがブラジルを何度か訪ねた事がある。美しい海岸で名高いリオデジャネイロ、その高台に両手を平行に広げる巨大なキリスト像を見上げた事を覚えている。未開の地を切り開いて造った首都ブラジリア、鉄鉱石を日本に大量に輸出する港ビトリア、魅惑の町ベロホリゾンテ、そして、日系人が100万人を超しているというサンパウロ州と州都サンパウロ、何でも資源がある州という意味をもつミナスジェネイロ州など懐かしい名前が思い出される。ブラジルは南米に在ってポルトガル語を母国語とする唯一の国であり、一時ポルトガル王室が本国を追われてブラジルに避難したこともあったという国だ。そして、日本の移民を多く受け入れた国でもある。日本の鉄鋼業に必要な鉄鉱石の供給国は、まず第一がブラジル、次にオーストラリア、そしてインドの順であり、日本の鉄鋼業とブラジルの鉄鋼業は技術面や資本面で密接な関係にあることを知っておかなければならない。最近、小泉首相がブラジルを訪問し、日系ブラジル人に大歓迎され、涙の記者

会見をしたことが報道されたが、今頃感激する方が可笑しい。ブラジルは地球儀でみると、日本の真反対側にあるが、文化的かつ経済的に言えば日本に最も近い国のひとつであり、日本の経済を支える大きな資源供給国なのだ。日本の「雨合羽（あまがっぱ）」や「いろは歌留多」はポルトガル語のC a p aやC a r t aから来ている事もポルトガルとの歴史の深さを物語っている。

そのポルトガル本国の歴史はあまり知られていないので、ここに要約してみよう。

①現在のポルトガル人の原型は、イベリア半島の名前の起源となったイベロ族とイギリス人の原型の一つでもあるケルト族の混血であるルジタニア人だという。紀元前2世紀頃から4-500年に亘って、ローマ帝国の支配下にあった。411年にスエビ族、585年に西ゴート族などのゲルマン民族の侵入をうける。711年には、アフリカのイスラム勢力が、西ゴート族を滅ぼし、400年強に亘って、イスラム勢力下におかれた。

②「レコンキスタ（キリスト教徒による国土回復運動）」が繰り返される。カスティーリャ、レオン王国のアルフォンソ6世が、北部から現在のリスボンを流れるテージョ川まで占領したが、イスラム勢力の反撃を受けヨーロッパ諸侯に援軍を求めた。その時駆けつけたのがフランスの貴族アンリッド・ド・ブルゴーニュで、彼は1094年に政略結婚でドゥーロ川とミーニョ川の間土地を手に入れ、ポルトゥカレ伯となった。その子アフォンソ・エンリケスは、1139年のオウリケの戦いで、イスラム軍に勝利し、ポルトガルの独立を宣言する。1143年に、自らポルトガルの初代王アフォンソ1世を名乗った。

③その後、十字軍の助けなどで、南進し、1249年の、アフォンソ3世の時に、遂に南部のアルガルベ地方を占領し、以来現在までその国境は変わっていない。一方イベリア半島の大部分はイスラム勢力下に置かれており、スペインが「レコンキスタ」を完了するのは、ポルトガルに遅れること約250年後であった。

④「エンリケ航海王子」（1394年-1460年）という方が出たのはポルトガルではアビス朝であった。彼の父親はアビス朝開祖のジョアン1世であり、彼を支えたのは海洋商人たちであった。1415年、イスラム勢力下の北アフリカのセウタを攻略し、マデイラ、アソレス、ベルデ岬諸島を発見し、「大航海時代」の幕を開けた。彼は、その生涯の間、常にアフリカ西海岸の探検を奨励した。このエンリケ航海王子の没後500年を記念してリスボンのテージョ河畔に53メートルを越える帆船を模った一大モニュメントが建てられている。航海王子を先頭に、両側には新天地発見に関わった冒険家や天文学者、宣教師たちが付き従っているという。無論、ヴァスコ＝ダ＝ガマの像もあるはずだ。

⑤そのエンリケ航海王子の後継者ジョアン2世（1481年—1495年）の時代になって探検航海は大いにはかどり、1488年にバルトロメウ＝ディアスがアフリカ南端の喜望峰に達し、更にヴァスコ＝ダ＝ガマは、この岬を迂回してインド洋を横切り、1498年、遂にインド西岸のカリカットに到達した。インド航路の開拓は、一種の国家事業として行なわれたから、それにとまなう香辛料の直接取引は、人口僅か150万のポルトガルの王室に莫大な利益を齎し、首都リスボンは一時世界商業の中心となったという。

また、1500年、ポルトガル人カブラルは、インドへの航海中、針路をあやまって今日のブラジルに漂着し、この地をポルトガル領とした。1519年、建国間もないスペイン王室の命令でポルトガル人マゼラン（マガリャンイス）は、香辛料の特産地モルッカ諸島（別名「香料諸島」）をめざして西回りの大航海に出発し、南アメリカ南端の海峡（マゼラン海峡）をへて太平洋を横切り、フィリピンに達した。2年間かかっている。彼の死後少数の部下はアフリカまわりで翌年スペインに帰国し、史上最初の世界周航を成し遂げた。

ここでインド航路という言葉を考えてみたい。西ヨーロッパ人は、東アジア、東南アジア、南アジアを含むアジア東半の地域を漠然と「インド」と呼んでいた節がある。「インド航路」（The sea route to India）は確かにインド西岸のカリカットまでを航路として開拓した時に命名したのだろうが、それは「アジアへの航路」（The sea route to Asia）という意味でもあった。

⑥人口の少ないポルトガルは、1479年に「レコンキスタ」を完成させて以来、勢力を伸ばしたスペイン、新興オランダ、そして歴史を持つベネチア等に次第に押され、遂に1580年にはスペインに併合されてしまう。60年間に亘ったスペインの支配を覆し王政復古を成し遂げたのは1640年のジョアン4世のブラガンサ朝であった。特にジョアン5世の時に、ブラジルのゴールドラッシュを背景に第二次黄金時代を現出する。ナポレオン戦争の時代は一貫してイギリスと行動を共にして、ナポレオンの干渉を退け続けた。しかし、ポルトガル王室はブラジルに避難し、一時ブラジルの独立を宣言したりし、本土とブラジルに跨る内紛が起こったりした。

⑦1910年王政は廃止され、共和制に移行する。1932年「サラザール体制」というファシズム体制が生まれ、スペインのフランコ政権と共にファシズム陣営の一翼を形成する。この体制は1974年まで継続するが、革新派の軍事クーデターが起こり、1976年に第二共和制が樹立され、現在に至っている。

「東洋の日本」と「西洋のポルトガル」との出会い、1498年の「インド航路発見」

があつての事だろう。その功労者がキャプテン ヴァスコ＝ダ＝ガマである。当時のインド航路発見のインパクトはヨーロッパ世界に衝撃を齎したようだ。それは現在でいうならば、月にアポロ宇宙船を着陸させたようなものだ。月の場合はアポロが到達したからといってそれほど経済的なインパクトはなかったが、「インド航路」の場合は、インド貿易を独占していたイタリアやアラビア商人にとっては、その独占を失う事であったし、ポルトガルなどのヨーロッパ諸国にとっては、経済的に大発展する切っ掛けとなった。宗教世界でも新興プロテスタントとカソリックのキリスト教世界での東洋への布教競争やイスラム教との勢力争いに繋がった。

ヴァスコ＝ダ＝ガマの「インド航路発見」は、彼に至る何人かの冒険家の業績のうえにあり、また当時のポルトガル王室にあった連綿たる夢の継承があつた。カソリック教会には、インド（アジア）に存在するとされていたキリスト教国（プレスター＝ジョン：中世の伝説上のキリスト教修道士でアジアまたはアフリカの王といわれた）への憧れがあつた。そして、経済的な動機として、特に14世紀以来、肉食が西ヨーロッパに普及したという背景があつた。食肉の調味に必要な胡椒などの香辛料は、需要の多い貴重品として巨大な利益を齎していた。「レコンキスタ」（国土回復運動）でイスラム教徒を駆逐し、いち早く独立を確保したポルトガルの君主たちが、直接、香辛料貿易の利益に預かろうと考えたのも当然であつた。これが、「インド航路発見」のスポンサー役を務めるポルトガル王室の一貫した悲願でもあつた。

（第十五編に続く）

参考文献：

詳説 世界史 江上波夫 山本達郎 林健太郎 成瀬治

詳説 日本史 石井進 笠原一男 児玉幸多 笠山晴生